

論文概要

○論文題目 思春期自閉スペクトラム症者への看護介入プログラムの有用性
ーストレスの自覚とセルフエスティームの向上ー

○指導教員

人間総合科学研究科看護科学専攻 森 千鶴 教授

(所 属) 筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻 (博士後期課程)

(氏 名) 菅谷 智一

目 的：

児童・思春期精神科では自閉スペクトラム症者の入院が増加しており、これらの対象者に対してエビデンスに基づく看護が求められている。精神看護においては、2000年前後からのパラダイムシフトにより、その人の持つ強みであるストレングスを見出し活用するストレングスモデルが注目されている。思春期は前頭前野が発達する時期であり、自己を客観視する能力であるメタ認知が発達していく。自閉スペクトラム症者のメタ認知は定型発達者より遅いものの、発達することが報告されている。さらに、児童・思春期精神科病棟の入院児はセルフエスティームが低く、高める必要性が指摘されている。そこで本研究では、思春期の自閉スペクトラム症者を対象にメタ認知を促し、自らのストレングスを自覚しセルフエスティームを向上させる看護介入プログラムを実施し、その有用性を明らかにすることを目的とした。

対象と方法：

1施設の児童・思春期精神科専門病棟にて、中学生・高校生の自閉スペクトラム症者12名を対象に看護介入プログラムを実施した。看護介入プログラムはメタ認知を促しストレングスを自覚し、セルフエスティームを高めることを目的とし、1週間に1~2回、45~60分のセッションを個別で5セッション実施した。調査内容は対象者背景として性別、年齢、学年、診断名、初診日、入院日、入院回数、入院形態、服薬内容、知能指数（IQ）、自閉症スペクトラム指数（AQ）、ユースセルフレポート（YSR）、子どもの行動チェックリスト（CBCL）の情報を収集し、プログラムの前後でメタ認知尺度、ストレングスの自覚を測定する自己肯定意識尺度、セルフエスティーム尺度を測定した。また、プログラムの最初と最後に自己意識に関して対象者に語ってもらい、プログラム終了後にはプログラムの評価について半構造化面接を行い、それぞれ内容をフィールドノートに記した。プログラムの有用性を検討するため、プログラム前後の尺度得点はノンパラメトリック検定を用いて分析し、自己意識の語りとプログラムの評価に関しては内容分析を参考にして質的に分析した。

結 果：

対象者は男子6名、女子6名、中学生5名、高校生7名であり、平均年齢は15歳で、IQは77~120であった。AQの平均は27.9で、カットオフ得点の33点に達しないものの高い値であり、精神状態と行動を評価する自己評価のYSR、保護者評価のCBCLでは、ひきこもりや不安抑うつのが高かった。尺度得点の平均は、メタ認知はプログラム前が3.32、後は3.82でプログラム後の方が高く効果量 r も大きかった（ $Z=-2.35$, $p=.019$, $r=.679$ ）。自己肯定意識尺度は、下位尺度に自己受容、自己実現的態度、充実感があり、自己受容はプログラム前が11.92、後は14.62で後の方が高く効果量も大きく（ $Z=-2.14$, $p=.032$, $r=.619$ ）、自己実現的態度のプログラム前は22.75、後は25.92で効果量が中程度であった（ $Z=-1.29$, $p=.196$, $r=.373$ ）。充実感はプログラム前が20.25、後は27.00であり、後の方が高く効果量も大きかった（ $Z=-2.43$, $p=.015$, $r=.703$ ）。セルフエスティームは、プログラム前が20.50で、後は23.83であり、後の方が高く効果量も大きかった（ $Z=-2.24$, $p=.025$, $r=.648$ ）。看護介入プログラム後の半構造化面接からは、プログラムの枠組みと内容の評価が得られ、枠組みの評価では41コードが抽出され、【プログラムはいい枠組みであった】、【看護師と話し肯定されてうれしい】、【自分と向き合うことができた】、

【自分のことを考えることができた】、【時間管理が必要】、【自分の好みに合わせて欲しい】の6つのカテゴリが産出された。プログラムの内容の評価では61コードが抽出され、【新たな知識を得た】、【自己に関心が向いてきた】、【自分の特性に気がついた】、【成長への欲求が高まった】、【今後を考えるきっかけになった】、【良い変化を実感】の6つのカテゴリが産出された。

考 察：

看護介入プログラムを実施し得点の前後を比較したところ、メタ認知、自己受容、充実感、セルフエスティームの得点が有意に上昇しており、自己実現的態度を含めて全ての効果量が中程度以上であった。また、看護介入プログラム後の平均得点は先行研究の得点と同程度にまで上昇しており、看護介入プログラムを実施したことによりメタ認知が高まり、ストレングスを自覚し、セルフエスティームが高められたと考えられた。プログラムの評価からは、本看護介入プログラムは良い枠組みであったものの、より一層自閉スペクトラム症の特性に合わせ、時間管理を明確に行うことや個別性に配慮したプログラムを実施することが望まれると考えられた。また、思春期の自閉スペクトラム症者にとって自分の脳のタイプや思春期の脳の特徴を理解することは有用であると考えられ、メタ認知を促したことで自分の特性に気づき、自己に関心が向いてきたことから、ストレングスを自覚することができていたと考えられた。

結 論：

看護介入プログラムにより、12名の思春期自閉スペクトラム症者のメタ認知が活性化され、ストレングスを自覚し、セルフエスティームが高くなる傾向が認められた。